

A・コンパニオン『反近代の作家たち』

松尾, 剛

<https://doi.org/10.15017/8809>

出版情報 : Stella. 24, pp.181-186, 2005-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

A・コンパニオン『反近代の作家たち』

松 尾 剛

よく知られているように、ランボーの『地獄の季節』は「絶対に近代的でなければならぬ」という決意とともに幕を閉じる。この点からすれば、「野生状態の神秘家」ではなく、近代主義者としての詩人像を思い描くことは、まったく正当なことだ。しかしながら彼の近代人としての自覚が、地獄巡りという長い逡巡の果てにようやく得られた結論にほかならなかったことを、忘れるべきではないだろう。じじつ、「地獄とは手を切った」はずのランボーが、時がたつと容易に近代への憎悪に捕らわれてしまう姿が、『イルミネーション』には散見するのである。たとえば「民主主義」と題された散文詩の掉尾に、「科学には興味もないが、安楽にはしたたかだ。進む世界は殺してしまおう。これがホントの進歩だ。前へ、進め！」という言葉を見出すとき、ひとは詩人の抱く絶望の深さに思いを馳せざるをえない。

ランボーの逡巡は、近代人でありつづけることがいかに困難であるかを物語っているが、おそらくこの困難は、近代に対置すべき理想が存在しえないことに由来していよう。いかにその欠陥をあげつらおうとも、近代以外の選択肢を示すことが出来ない以上、反近代という思想は積極的な価値をもちえない。かくして、近代において反近代主義者たらんとした作家たちは、みずからを「貧乏人の犬」あるいは「無益なカサンドラ」として冷笑するほかない。反近代思想家とは、畢竟あらかじめ敗北を運命づけられた存在なのである。

このような作家たちを縦横無尽に論じてみせたのが、パリ第4大学教授アントワヌ・コンパニオンによる『反近代の作家たち——ジョゼフ・ド・メーストルからロラン・バルトまで』である¹⁾。まず著者は「思想」と題された第一部において、フランスにおける反近代主義の思想的特徴を、ひとつひとつ明らかにしてゆく。

著者によれば、1789年を境として、従来の伝統主義とは明らかに異なる「反

近代主義的な近代の感性」をもった作家たちが、フランス文学史上に現れた。文学的にも思想的にもきわめて多様な彼らに共通するのは、大革命とその遺産への憎しみだ。彼らは人権を否定し、理性を疑い、憲法を嘲笑し、大衆を軽蔑する。この潮流を代表するのが、ジョゼフ・ド・メーストルやシャトーブリアン、あるいはボードレールである。なるほど伝統を愛する反動家はいつの時代にも存在したし、これからもあるだろう。しかしコンパニオンは反近代主義者をこれらの伝統主義者から峻別する。著者によれば、ルイ・ド・ボナルドやシャルル・モーラスら伝統主義者にとって、フランスの辿るべき道筋は王政復古以外にはありえなかった。この意味において、伝統主義者の主張と政治的プログラムはきわめて明快である。しかし反近代主義者は違う。ド・メーストルやシャトーブリアンは、革命とそれに続くテロルをあまりに深く経験してしまったため、フランスを旧体制に復帰させることなど、とうてい信じられなくなった作家なのである。じじつ、ド・メーストルは「長いこと私たちは革命をひとつの〈事件〉だと考えてきた。しかしそれは間違いであった。それはひとつの〈時代〉だったのである」と語っている。革命がひとつの時代だったのであれば、最早それを無かったことにはできない。その時代はすでに経験されてしまったのであり、つまり世界は決定的に変容してしまったのである。

このような革命の経験から、反近代主義の底流をなす6つの特徴が生じたと、コンパニオンは考える。まず彼らは反革命的である。しかしながら、すでに述べたように、シャトーブリアンやド・メーストルにとって、革命政府を打倒し、1789年より以前の世界を回復することなど問題にならなかった。むしろ彼らは革命とテロルの悪に積極的な意味を見出そうとしたのである。彼らによれば、この時代の苦悶は神意に基づくものであり、革命とはすべてのフランス人が甘受すべき神の懲罰なのであった。よって革命は否定されるべきでもなければ、圧殺されるべきでもない。神罰を甘受することでこそ人間の罪は浄化されるのだから、この時代の苦難は堪え忍ばれねばならないのである。神の国は、我々の苦難が終わった後にこそ到来する——そう彼らは主張したのである。コンパニオンが正しく指摘するように、彼らの歴史観はその不可逆性を旨とする点において、むしろヘーゲルやマルクスに近い。

第二に、反近代主義者たちは反啓蒙的である。啓蒙の根本は人間の理性を信じることにある。それゆえにこそ、理性の命ずるところにしたがって、フラン

ス人は理想の国家像を構築し、革命を推進した。とすれば当然のことながら、反革命論者のシャトーブリアンらは反啓蒙主義者たらざるをえない。ここで重要なことは、理性への対抗基軸として持ち出されたのが、個人的・歴史的な経験だったことである。理性のもたらす抽象ではなく、触知可能な経験的事実をこそ、彼らは持論の根拠に据えたのだ。ド・メーストルのあの言葉、すなわち「1795年の憲法は、それ以前のものと同じく、〈人間〉のために起草されている。だが、この世界に〈人間〉など存在しない。私はこれまで、フランス人やイタリア人やロシア人などに会った。[...] しかし、はっきり言うておくと、〈人間〉については、そんなものに出会ったことなど、絶対にない」という言葉は、この文脈で理解されるべきものなのである。かくして彼らは歴史主義的であり、歴史のなかで積み重ねられた事実こそ神の法が隠されていると主張するのだった。

第三に、彼らはペシミストである。そもそも『リトレ辞典』によれば、ペシミストとは、悪の過剰のなかにこそ善を見出そうとする人間を指すという。であるならば、革命のテロルに神意の実現を見るド・メーストルは、本来の語義におけるペシミスト以外の何ものでもあるまい。さらに言えば、人間の理性を信じない彼らは、進歩の概念も信じない。人間の歴史とは、彼らの目には、デカダンスの歴史にほかならないからである。しかしながら、このペシニスムは無気力であることを意味しないことに、著者は注意を促す。じじつ、性善説にまどろむブルジョワの怠惰を軽蔑する彼らは、「絶望的な活力」に身をまかせ、激しく近代社会を攻撃したのであった。

第四に、彼らは人間の原罪を信じる。人間の理性や悟性を信じる近代主義者が性善説に立脚するのに対し、反近代主義者は人間を生まれながらに罪あるものと見なす。ド・メーストルによれば、人間の原罪ゆえに、神は革命という罰を下した。人の始祖アダムは罪を犯したが、人間は日々罪を犯すことで、アダムの原罪を繰り返し実現している。つまり、すべての人間は罪ある存在なのだ。そうであるがゆえに、神の懲罰は善人悪人を問わず、その頭上に降り注ぐのである。この世に無垢な者など一人もいない。そうでなくては、いかにして無実の者までが革命の犠牲となったことを説明できようか。この原罪概念は後世の反近代主義者たちに受け継がれ、ド・メーストルの〈弟子〉ボードレールは言うに及ばず、ブルーストにさえその筈が響いていることを、コンパニオンは的

確に指摘している。

第五に、反近代主義者は崇高の美学を奉ずる。神意の顕現した大革命は、彼らにとって恐怖と魅惑の対象であった。革命が人知の及ばぬものとして暴走し、無数の人間の命を奪っていく有様は、彼らを魅了すると同時に、恐れおののかせた。テロルを前に畏怖する人間の感情が崇高の美学を育んだのである。理解不能であるがゆえに畏敬の念を引き起こす崇高な対象への愛着。それこそが反近代主義的美学の典型であった。

最後の特徴は、罵倒を旨とする文体である。逆説をもてあそび、論争相手を嘲弄するド・メーストルの文体は、流暢なブルジョワ的文体への憎悪と相まって、ボードレールを経て、ブロワやベルナノス、果てはセリーヌにまで継承されていった。なるほど、たしかに悪罵に満ちた彼らの文体は読者の良識を逆なでし、時として非論理的ですらある。それをもっともよく象徴しているのが、ド・メーストルの駆使する「純粹な不純」「自由な奴隷」「自発的にして運命的」などの撞着語法である。しかしながら、そこに看取されるのは、コンパニオンも指摘するように、論理ではなく言葉への、理性ではなく情感への愛、すなわち崇高の美学なのである。

以上、簡略ながら本書の第1部をまとめてみたが、畢竟「反近代の作家たちとは、けっきょく近代の流れに巻き込まれながらも、この流れを嫌悪する者たち」であり、別言すれば「近代的なものに欺かれることのない〔…〕真の意味での近代人」であるといえるだろう。この点において、彼らはランボーの陰画を形成していると言わねばならない。ランボーが『地獄の季節』の末尾において、近代人たる覚悟を引き受けたように見えながら、実際には近代への嫌悪感を隠すことができなかったのと同様、反近代の作家たちは、近代的価値観を厳しく批判しながらも、結局は近代以前の世界を諦めざるをえなかったのだ。両者はまったく異なるように見えても、じつはいずれもが近代と反近代の狭間で揺れ動く存在なのである。

つづく第2部「人物」では、近代の潮流に逆らう作家たちが個別に論じられている。再度シャトーブリアンとド・メーストル、くわえてルナンとブロワ、ベギーやソレル、チボーデにバンダ、グラックにバルト。もちろん、彼らは第1部で俯瞰された特徴をすべて兼ね備えているわけではなく、また必ずしも政治的な反近代主義を標榜したわけでもない²⁾。

しかしながら、たとえばジュリアン・グラックを見てみよう。なるほど、一貫して政治には距離をおき続けたグラックの文学を、従来の反近代主義者たちと同列に論じることができないのは明らかだ³⁾。だが、「文学的テロル」(ポーラン)を極限まで推し進めるブランショに対し、常套句的な形容詞の使用を擁護するグラックの美学は、ポエジーと言葉に対する信頼を取り戻すことで、日常のなかに〈聖なるもの〉を回復せんとする野心を内包していたのである。もちろん、このような言葉と聖性への愛こそは、言うまでもなく、ド・メーストルからボードレールを経てバタイユやカイヨワへといたる反近代の潮流に棹さすものである。この意味において、第2次世界大戦後のフランス文学のなかにも反近代の潮流は密やかに息づいているのである。

以上、駆け足ではあるが、主として思想の面から本書が明らかにしえたことをまとめてみた。それにしても驚くべきは、大革命以降の〈反動的〉文学作品を精読し、そこから反近代の特質を剔抉する著者の手際の鮮やかさである。けっして注目を集めてきたとはいえぬ思想の流れを、かくまで明快に論じてみせた類書を書評者は知らない。このような、いわば日陰の思想史について知見をうることは、正統な文学作品の読解にも新たな光を当ててくれるに違いない。しかも希有なことには、本書はこの手の研究にありがちな政治的な偏向からも免れている。フランス文学を研究する向きには、ぜひとも手にとってほしい一冊である。

註

- 1) Antoine COMPAGNON, *Les Antimodernes. De Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque des Idées», 2005, 464 pp.
- 2) ヴィシー政権の瓦解以降フランスにおいては、政治的反近代主義を標榜することが、事実上不可能になったことを、コンパニオンは指摘している。なお著者によれば、反近代思想を正統な意味において継承しえた最後の作家こそはドリュ・ラ・ロシュェルであった。これにかんして付言すれば、書評者はかつてドリュ作品における近代と反近代の錯綜した関係を論じたことがあるので、参照いただければ幸いである(拙稿「肉体復興のためのテクノロジー——ドリュ・ラ・ロシュェルの『ジル』を中心に——」、『言語文化研究』第5・6合併号、立命館大学、1999年2月、245-258頁)。

- 3) しかしながら、グラックが終生にわたって、その美学に敬意を表しつづけたジュール・モヌロなる人物が、〈聖なるもの〉の復活を試みるコレージュ・ド・ソシオロジーの創始者であり、かつ戦後のある時期には国民戦線の有力な幹部であったことを、コンパニオンは注意深く指摘している。もちろん著者は、これをもってグラックを極右文学者と決めつける愚を犯しているわけではない。しかしながらグラックの反近代的美学には、極右思想と通底しかねない危うさが潜んでいることもまた明らかであるように思われる。